

氏名	岩井 洋
学位の種類	博士(異文化コミュニケーション学)
報告番号	乙第323号
学位授与年月日	2016年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第2項該当
学位論文題目	「ラフカディオ・ハーンと時代の幻想—ニヒリズム、大乘仏教」
審査委員	(主査) 野田 研一 阿部 治 河野 哲也(立教大学大学院文学研究科教授)

I. 論文の内容の要旨

ラフカディオ・ハーンと時代の幻想：ニヒリズム、大乘仏教
目次・本文・注・参考文献を含め、全 269 頁。

(1) 論文の構成

序論

0.1 本論文の立脚点

0.2 ラフカディオ・ハーン先行研究の概要・成果

第1章—近代の共同幻想

1.1 世界とのきずなとしての意味

1.2 物象化

1.3 言葉という幻想

1.4 時計の時間—物象化される時間

1.5 物質・物質現象という幻想

1.6 世紀末実証科学—意味・価値の解体

1.7 透視遠近図法—煩惱の先入観よりなる世界

1.8 幻想化されゆく死と死者

1.9 恣意的像としての世界

1.10 自己という幻想

1.11 共同幻想のまとめ

第2章ニヒリズムの諸相

2.1 実体の失われた近代

2.2 近代の危機的問題

2.3 ニヒリズムへの時代意識

2.4ニヒリズムという病い

2.5 関係という感情の時代

2.6 人をつなげまとめる理念・存在の不在—個人主義

2.7 煩惱の放縦

第3章ニヒリズムの超克—個我から共同へ

3.1 触覚

3.2 盆踊りの霊界—人々が縁により集う時・場

3.3 華嚴経への共感—融和する世界

3.4 唯識論—空無への超越

3.5 空論—大乘仏教まとめ

第4章 空無と縁・縁起

4.1 空無=縁・縁起

4.2 輪廻

第5章 永生へ

5.1 アートマン的個人を超えるブラフマン的自己

5.2 空無と永生—nirvana(涅槃 ハーン)

5.3 空無なる縁・縁起・カルマこそが世界の実体である

(2) 論文の内容要旨

本論文は、ラフカディオ・ハーンの思想、なかでも19世紀末欧米におけるニヒリズムを背負いつつやってきた訪日外国人ハーンが日本で見いだしたものとは何かを主題化した論文であり、その根底において自然環境をめぐる思想を、近代の病いとしてのニヒリズムと日本での異文化体験を手がかりとして問い直す試みでもある。

第1章において、近代とは、実体的関係論から関係的關係論へとシフトした時代だとする基軸的認識を提示し、意味と主体、物象化、言葉、時間、物質、幻想、科学、遠近法、死、世界像、理性的自己といった多様な概念と現象を批判的にたどりながら、実体性を喪失し恣意的像として「幻想化」されてゆく近代世界と自己の関係を描出する。

第2章では、実体性の喪失による恣意的世界像を生きる近代と、そこで生成される「幻想」をハーンの『怪談』における「幽霊的存在」概念と結合させ、「西欧世紀末を蔽うニヒリズム」(p. 117)とは、実体性の喪失、関係的關係論に起源することを示しつつ、それは不可知論、絶望、感情、形而上学の劣化、「虚位なる自己」をめぐる諸問題を通じて、著者のいう「近代の共同幻想」(p. 151)の倒錯性(現実を幻想に、幻想を現実に)に至るとするプロセスを剔出する。

第3章では、ハーン自身が背負ったニヒリズムとそれを超越する試み、すなわち実体的関係論への回帰の試みを、知覚/感覚論、なかでも深い実体性の感覚をとどめる「触覚性」への問題意識から開始し、皮膚感覚、距離の解消、相互浸透、触覚的聴覚、遺伝的記憶、幽霊踊りといった「共生の感覚場」(p. 166)をめぐる事象を丁寧にたどりながら、徐々にハーンが帰依していった大乘仏教の認識論と存在論、具体的には華嚴経の「融和する世界」、唯識論、空論との理論的照合を進め、個とは何か、現実とは何か、連環とは何かを問い直してゆく。

第4章では、より具体的にハーンの世界や発言録に即しながら、このような関係的關係論の時代へのシフトを19世紀末の「時代の幻想」と名づけ、それに抗い、たたかった思想家・文学者としてのハーンを、その著作を丹念に読み解きながら浮き彫りにする。その上で、「近代の共同幻想」と著者が呼ぶ「関係的關係論」の世界で自明のように「現実」と呼ばれている事象が「恣意的に錯視され幻想」されたものに他ならないことが提起される。

第5章では、これまでの、西欧的思想の側から「時代の幻想」を読み解くというスタンスを反転させ、いわばハーンの側から「時代の幻想」を読み解くスタンスを取りながら、ハーン自身が

提起する輪廻、永生、空無、煩悩、カルマといった仏教的観念を解説しながら、ハーンという作家の異文化的環境における孤独な営みを「他者により生み出され・支えられ・見守られ、生と存在の意味を与えられ、そして死によってもなお永生たり得る全一存在」(p.269)への一種の超越の希求として記述してゆく。

Ⅱ. 論文審査の結果の要旨

(1) 論文の特徴

本論文の最大の特徴は、ラフカディオ・ハーンという来日アメリカ作家が内包していた19世紀末的ニヒリズムを、①多岐にわたる文献渉猟に基づいて綿密に解説している点、および②ニヒリズム以降の近代的世界像の問題を「幻想」という概念を通じて明確化しようとする理論的試みにある。本論文で使用される「幻想」という概念は、人間が「人間存在を中心にして人間の能力と言葉の及び得る限りのマイクロ世界を一閉塞的に一作り上げ」たものであり、つまり「人間主観の所産」としての世界を、客観的現実として認識＝措定する態度、として定義されるものである。こうした、人為的に世界＝表象として構成される非実体的な（かつ倒錯的な）「世界像」そのものを著者は「幻想」という名前で呼ぶ。そして、このような倒錯の起源には実体論を喪失した関係論的認識の世界としての近代社会の出現がある。岩井氏が対象とするニヒリズムとは、この「関係的関係性」の世界が産出する諸々の「幻想」への客観主義的信仰のことを指すのである。

本論文が論じる「幻想」とは実体論を喪失した時代の「ニヒリズム」にほかならず、人間中心主義的に布置された主観と客観の顛倒を自明とした思潮であり、それは現在まで地続きの世界であるとされる。著者が注目するラフカディオ・ハーンは、そのような「ニヒリズム」＝「時代の幻想」に封じ込められた19世紀末のアメリカを脱け出し、異文化としての明治日本に根源的な希望もしくは脱出口を見いだしていた。とくに後半以降論究されているように、そこには大乘仏教の大きな影響力もあることが説得力を以て示されつつ、第4章で示されているように、「否定的ニヒリズム」から「積極的ニヒリズム」(p. 217)へのハーン自身の転回がその注目すべき証左である。その径庭を、本論文は日本の物語の「再話」であるハーンの『怪談』を中心とする物語群、および書簡など多様な一次資料の提示・解析を通じて明らかにする。

本論文の射程は、さらに一見距離があるように思えるかも知れないが、環境思想への問い直しにも結びついており、また著者自身が環境思想をめぐる多様な系譜学を踏まえた上で、あえてこの問題そのものについては明示化しない方法を採用しているために、見えにくくはなっているが、この論文そのものが近代と前近代、実体論と関係論を初めとする多様な問題群（意味と主体、物象化、言葉、時間、物質、幻想、科学、遠近法、死、世界像、理性的自己）をきわめて総合的に問い直すコスモロジー論にして環境論となっている。

(2) 論文の評価

本論文は、ラフカディオ・ハーン思想のなかでも19世紀末欧米におけるニヒリズムを背負いつつやってきた訪日外国人ハーンが日本で見いだしたものとは何かを主題化した論文であり、その根底において自然環境をめぐる思想を、近代の病としてのニヒリズムと日本での異文化体験を手がかりとして問い直す試みでもある。と同時に、著者自身のこれまでの経歴からするならば、環境思想と文学への新たなアプローチと見ることができる。

評価のポイントは主に以下の諸点である。

1) 近代を実体的関係論から関係的關係論へのシフトとしてとらえる視座の設定

これにより、生の意味、物象化、言葉、時間、幻想、科学、遠近法といった多様な概念と現象を批判的にたどりながら、実体性を喪失し恣意的像として「幻想化」されてゆく世界と自己の関係を多面的に描出することに成功している。

2) 実体的関係論の喪失をニヒリズムと定義し、絶対性の喪失に伴伴する関係論的世界観の幻想性を提示

著者が本論文で対象とするニヒリズムとは、まさしく、この関係的關係性の世界が産出する諸々の「幻想」への客観主義的信仰のことを指す。

3) ニヒリズムを根源的に背負った19世紀末の作家・思想家としてのラフカディオ・ハーン像の提示

ハーンが著者のいう「時代の幻想」のなかで何を見、何を拒否しようとしていたかを、広範な一次資料、文献調査とその分析を通じて明らかにしている。思想としてのハーンを読み解く重要な試みであり、思想家としてのハーンの魅力的な言説に出遭える引用が効果的であり、また綿密に練り上げられた著者自身の思考の言葉の深さも高く評価される。

4) 関係的關係論の孕むニヒリズムの世界を超克する方途としてハーンが大乗仏教的世界観に向かったことの丹念な跡付けと分析。

ハーンが深く受けた仏教思想の基本的な視点（唯識論、空論、カルマなど）をいっぽうでハーンの世界観や言説との連関を語ることによって説明し、他方で、ニヒリズムをめぐる思想的な視点でそれを追認している。

5) 環境思想論でいうところの「人間中心主義」批判の一環としての位置づけ。

環境思想においてはすでに「人間中心主義」批判というかたちのアプローチは常識と化しているが、本論文もそのような視点を内蔵する研究であり、それを具体化するための有効な方法としてハーンとニヒリズムが召喚されたものと考えられる。もちろん、「人間中心主義」批判はきわめて多面的に遂行される必要があり、本論文のような一見すると環境系とは見えない研究にもこのような問題意識は共有されていることが分かる。

6) 綿密で論理的な文章と論述。

本論文の文章も論述の形式も一分の隙もなく考え抜かれたきわめて綿密な文体を実現している。その個々の文のレベルの高さと緊迫感には瞠目すべきものがある。にもかかわらず、逆にその緊迫感のレベルがかえって読み辛さに繋がり、ときに非論証的な印象さえ与えかねない面が若干見受けられた。しかし、それについては、著者自身自覚的であり、「序論 0.1.3 本論文の形式について—作品内在解釈の試み」において充分根拠づけられている。

7) 〈幻想〉論であると同時に〈幽霊〉論

本論文は、〈幻想〉論であると同時に〈幽霊〉論であるという魅力的な両義性の発見にある。ハーンがこのように論じられる必然性、その主要作品が〈怪談〉である必然性がそこで交叉している。これはハーンがなぜ〈怪談〉を書いたのか、その理由を開示するに充分である。

以上の諸点より鑑みて、本論文はきわめて水準の高い研究の成果として、審査委員会としては高く評価できると判断する。